

「勇気」についての断章集

## 前書き

この本は

あなたが「自分自身」を捨てることなく

決然とそれを受け生きて生きることができるよう

あなたの「勇気」に息を吹き込む目的で書かれました

あなたが社会や他人の目を気にすることで

心に迷いが生じた時には

本書の言葉を思い出してください

あなたの「勇気」が

あなたを導いてくれることを祈ります

目次

逆説

背骨

本当の勇氣

十字架

数字にならないもの

生きる勇気

「父」と「母」

「虚構」と「現実」

随所に主となる

美学

天を見る人

真理

# 逆説

「立とう」として力むと

それによつて姿勢が強張るが

もしも重力に身を任せれば

ますます背骨は屹立<sup>きつりつ</sup>する

「法則」から逃れようとしてジタバタすると

かえってそれによって囚われるが

「法則」に思い切って身を委ねると

なぜだか それに束縛されず「自由」になれる

また

結果をコントロールしようと躍起になると

その欲求によって振り回されるが

結果を操作することを放棄すると

「起こるべきこと」が起こって丸く収まる



「生」はいつだって

逆説でいっぱいなのだ



# 背骨

たとえどれほど強く

「自分の足で立とう」と思っていたとしても

背骨が弱いと それは無理だ

その人の自立心は背骨に如実に表れる

背骨が弱り　うなだれたままでは

自分の意志は貫けない

だからこそ

日頃から背骨に息を通すことだ

頭頂から息を吸いこんで

清々しい空気で背骨全体を満たすのだ

背骨が確立された時

その人の「独立心」もまた確立される

「自分の足で立つ」ということとは

精神論では決しない

なぜなら

その人の氣骨と独立心は

他でもない 当人の背骨に宿るからだ





# 本当の勇氣

恐怖が襲い掛かってきた時

人は慌てて逃げ出そうとする

恐怖に捕まらないように

その人は必死で走るのだ

しかし

そうやって身体に力みがあることで

かえって恐怖に支配されてしまう

恐怖と闘うことを通じて

恐怖が一層強くなるのだ

だから

恐怖とは最初から闘わないことだ

なぜなら

恐怖とはしよせん

心が生み出す「影」に過ぎないからだ

「影」にはそもそも実体がないので  
つかみ掛かって闘うことが不可能だ

逆に

「影」を相手に奮闘することで

その人はどんどん消耗してしまう

だから

もしも恐怖が襲ってきたら

一切の抵抗をやめてみる

きつと

身体は震えるだろう

あるいは

胸を引き裂かれるような

痛みを感じるかもしれない

だ

恐怖にできることなど

しよせんはそれだけのことに過ぎない

恐怖は私たちの身体を震わせて

胸をいくら引つかくことができるだけなのだ

このことを直視する勇気が持てたなら

恐怖はしよせん「影」に過ぎないと理解できる

もうあなたは恐怖に構わなくなる

たとえ恐怖が訪れても

それに巻き込まれずにいられるだろう



「本当に勇敢な人」というのは

「恐怖しない人」のことではない

恐怖がたとえ内側に在っても

それに飲まれない人のことだ

逆に

恐怖をそもそも感じない人は

勇気について何も知らない

そういう人は

たとえば向こうから列車が突っ込んできて

何も感じないまま立っているだろう

もしもあなたに恐怖が在るなら

それはあなたがそれだけ注意深い証だ

だから

あなたはそのような注意深さを

天から与えられたことに感謝するべきだ

なぜなら

あなたの内に在るその注意深さが

あなたを目覚めさせるからだ

あなたは恐怖と面と向かう

あなたは「恐怖が在る」と知りながら

その闇の中へと あえて入っていくだろう

その勇気が

あなたのことを覚醒させる

あなたの意識を純粹にし

あなたの背骨をしなやかにする

そのようにして

あなたは目覚め

本当の意味で「勇敢な人」となる





# 十字架

「祈る」というのは

「生きる」ことだ

だから

「祈り方」を知っている人は

「生きる責任の背負い方」もまた知っている

逆に

何らかの「神」を信仰し

決められた作法に従って祈っていても

「生き方」を知らない人はたくさんいる

「自分の足」によって立ち

「自分の道」を歩くこと

それが

その人にとっての「祈り」となる

逆に

「自分の人生の責任」を

他人に背負わせようとするなら

その人は「祈り」を表現できないだろう

そうして人は 時として

神に「責任」を背負わせて

救い主に「原罪」を背負わせる

だが

「自分に与えられた十字架」は

自分自身にしか背負えない

どんな救世主であつても

その人の代わりに

「十字架」を背負う権利はないのだ

だが

それはとても良いことだ

なぜなら そうやって

自分自身で「十字架」を背負って歩くことで

その人の心は「浄化」されるからだ



確かに 他人に代わりに

「十字架」を背負ってもらうなら

その人は「人生を生きる苦悩」から

一時的には目を逸らせるだろう

だが 同時に

その人は「生きる喜び」についても

ずっと無知なままになってしまう

「生きる喜び」を知っている人は

「生きる苦しさ」も知っているものだ

そういう人は

「十字架」を他人に背負わせようとせず

自分自身でそれを生きる

そして

「十字架」はいつも

「今ここ」に在る

もし そのことを当人が受け入れるなら

本当の意味での「天国への扉」が

ゆっくりと開き始めるだろう

そうして

眉間に刻まれたしわは緩み

胸に穏やかな風が吹く

深く呼吸して　その人は笑う

「生きる」ということの意味を知り

「自分の過去の苦悩」の小ささを笑うのだ

「生」は人に苦しみを与え

人はその中でのたうち回る

「なんという十字架を背負わせるのか！」と

その人は「天」を呪いもする



だが　もしも

「自分の十字架」を他人の手からひったくり

「自分自身」で背負うなら

その人はそれを乗り越えるだろう

そこには 確かに

「苦味」と「旨味」の感覚がある

そして

全ての「味」を通った後

その人は知る

「生きる」ということの味わいを

人は知るのだ